

# 藤原義江の演奏旅行から見る昭和2年秋の札幌、盛岡、秋田における西洋音楽のローカライズについて

上野 正章

本論は、昭和2年（1927）の秋に行われた藤原義江の演奏旅行に焦点を当て、地方都市における西洋音楽が普及するメカニズムを演奏会とローカライズに注目して明らかにする試みである。札幌、盛岡、秋田という三つの都市で開かれたリサイタルを取り上げ、1. 演奏会の概要を明らかにし、2. 演奏会がどのように宣伝されたのかということ明らかにし、3. 演奏会を巡る人々に焦点を当て、4. 当地の音楽文化を描き出すことを試みる。本論では以下の普及の際の新聞社による演奏会の宣伝及び、地域の書店や蓄音機店の協力、また、広く西洋音楽や日本音楽を楽しんでいた地方都市に住む人々の音楽の好みと藤原義江の演奏会の曲目との親和性を明らかにする。

キーワード：藤原義江、札幌市、岩手県盛岡市、秋田市、日本近代音楽史（受容研究）

## 1. はじめに

日本では、大正末から昭和初期にかけて活発な演奏会活動が始まった。この時期、ヴァイオリニストのジンバリストやハイフェッツ、歌手の藤原義江や関屋敏子、新交響楽団（現在のNHK交響楽団）等々、音楽家や音楽団体が日本各地を旅して演奏会を開催した。中でも注目したいのが藤原義江である。というのも、昭和2年（1927）の秋に東アジアを駆け巡ってリサイタルを開催し、各地で類を見ないほどの大反響を引き起こしたからである。巡業地は次の通りである。

9月4日 東京	28日 大阪	20日 熊本	18日 岡山
9日 静岡	29日 神戸	21日 佐賀	21日 福島
11日 東京	31日 名古屋	22日 福岡	22日 東京
12日 横浜	10月3日 東京	24日 大分	23日 水戸
14日 札幌	6日 松本	25日 釜山	24日 宇都宮
16日 函館	7日 長野	27日 京城(現ソウル)	25日 仙台
17日 青森	8日 高田	28日 安東	26日 横浜
18日 盛岡	9日 柏崎	29日 奉天(現瀋陽)	27日 東京
20日 秋田	10日 富山	30、31日 大連	28日 神戸
21日 山形	11日 京都	11月3日 広島	29日 大阪
22日 若松	13日 高知	7日 名古屋	30日 京都
23日 新潟	16日 松江	9日 金沢	12月1、2日 松江
24日 長岡	17日 今市(現出雲)	10日 新潟	6日 東京
27日 和歌山	19日 門司	17日 姫路	8日 横浜

〔藤原 1928：127-131〕

また、プログラムは次の通りである<sup>(1)</sup>。第1部が西洋歌曲、第2部が歌劇関連、第3部が日本曲、第4部が西洋の民謡という多彩な内容を持つ。

第1部	第2部	第3部	第4部
1. ラルゴー ヘンデル	1. 歌劇『リゴレット』	1. 新子守唄	1. 庭の千草 ムーア
2. すみれ	ヴェルディ	2. 待ちぼうけ	2. ヴォルガの舟歌
スカララッティ	2. 歌劇『マノン・レスコー』中の皆様の中で	3. 箱根八里は	ロシア民謡
3. 子守歌 ブラームス	ブッチーニ	4. 鐘がなります	3. 麦打の唄
4. われ夢に泣けり	3. 歌劇『カルメン』花の	5. からたちの花	ヴェニス民謡
シューマン	歌 ビゼー	(以上山田耕筰作曲)	藤原義江、
5. 東方の歌		6. 船頭の唄 伊藤祐司	マキシム・シャピロ
リスムキー=コルサコフ		7. 出船の港 中山晋平	
6. ジロメッタ シベッラ			

拙稿『The Diffusion of Western Art Music in Osaka during the 1920s<sup>(2)</sup>』で指摘したように、大阪市における西洋音楽の普及の事例にみるように、演奏会の宣伝効果（予告、演奏会評など）が、藤原の演奏会でも大きく影響していたのではないかと想起できる。しかしながら他地域においても同様の効果があったのか、なかったのか。具体的な状況を明らかにしなければならない。

本論は、昭和2年（1927）の秋に行われた藤原義江の演奏会と西洋音楽のローカライズに焦点を当てて、新聞報道を材料に、西洋音楽が普及するメカニズムを考える試みである。着目するのは初期の巡業地の東北・北海道地域である。この地域に注目したのは、1. 藤原義江の演奏会を全国的に予備調査した結果、議論に足る資料を収集することができた地域であり、2. すでに地域における西洋音楽の受容の研究に着手されているので音楽文化の概略がつかみやすく<sup>(3)</sup>、3. 各地域がほぼ独立した都市圏を営んでいるという理由による。

まず、それぞれの地域について藤原義江の演奏会の状況を整理し、次いで、演奏会がどのように広報されていたのかということを概観し、その後、演奏会を巡る人々に焦点を当て、地域の音楽文化を新聞記事から明らかにするという作業を経た後、最後に総合的に西洋音楽が普及するメカニズムを検討したい。

なお、文中の西洋音楽という呼称であるが、昭和前期になると明治期に導入された西洋音楽のローカライズが進展して様々な状況が発生している。演奏会がピアノ伴奏付き歌曲から構成されていることに注目し、便宜的にこの用語を用いている。

## 2. 各地における藤原義江の演奏会の状況、宣伝、音楽文化

### 2-1. 札幌

#### 2-1-1. 演奏会の状況

札幌は横浜の次の公演地である。

上野で今日から私と旅行に出してくれるマキシム・シアピロ氏に逢ひ、無事10時半の急行に乗る（藤原1928: 137）。

汽車旅行の時代、遠出は大いに時間がかかり、北海道旅行など大騒ぎとなる。「無事」とは大げさに感じるが、上野発青森行急行列車は数少なく、彼らはどうしてもこの夜汽車に乗りなけりなかつたのである。彼らは次のような経路を辿った。

9 月 12 日 22 時 30 分（上野発）  
9 月 13 日 7 時 20 分（仙台経由）  
11 時 36 分（盛岡経由）  
16 時 25 分（青森着）  
17 時 30 分（青森港発）  
22 時 00 分（函館港着）  
23 時 00 分（函館発）  
9 月 14 日 7 時 54 分（札幌着）  
19 時 00 分 リサイタルの開演

9 月 12 日の横浜公演に続いて 14 日に札幌公演というのは余裕のあるスケジュールに見えるが、昭和 2 年（1927）の秋においては、リサイタルが終るや否や夜行列車に飛び乗り、到着した日の夜に演奏会を開くという、とても厳しいスケジュールであった。

新聞報道によると、到着後、彼らは宿の山形屋に赴き、次いで、二人で小樽新聞札幌支社および北海タイムス社を訪問したらしい〔無記名〔小樽新聞〕 1927f〕。藤原の宿泊したのは別館だが、山形屋は札幌を代表する旅館の一つで、「駅を降りてすぐ右手に、入母屋造りの大屋根をかまえ、その上に名物の「更上一層楼」をたちあげていた。この望楼にのぼると、『脚下に札幌市を瞰視すると共に眺望千里極目際涯なき石狩原野を双眸の中に収め』たという」〔越野 1982：85〕。



〔図 1〕 山形屋の全景

演奏会は夜の 7 時から三友館で開催され、大成功を収めた。藤原は日記に次のように書き記している：「聴衆の態度の美しい事、<sup>さすが</sup>流石は札幌である。シヤピロ氏もよろこんで特別にピアノの独奏をしてくれた。これは札幌の聴衆にはひろいものである」（藤原 1928: 137）。新聞報道も演奏会の成功を次のように伝える。

札幌市における藤原義江氏独唱会は既報の如く 14 日午後 7 時より三友館において開催〔、〕主催者側を代表して中村富貴堂主人挨拶を述べ〔、〕定刻藤原シヤピロ両氏万雷の如き拍手に迎へられてステージに現はれ〔、〕プログラムの順により演奏に移つたが〔、〕アンコールに次ぎ<sup>ママ</sup>アンコールをもつてボルガの舟唄の如きは三再アンコールをされるといふ有様で〔、〕伴奏者のシヤピロ氏を始め来会のロシア人は感激の涙にむせんだ〔。〕かくして第 2 部の終りにシヤピロ氏の<sup>ペトローベンの</sup>バリエーションの独奏あり〔。〕聴衆は只氏の妙音に酔ひ同 9 時 20 分盛会裡に閉会した〔無記名〔小樽新聞〕 1927h〕。

頻繁にアンコールが繰り返されたことから聴衆の熱狂が推し量られる。なお、函館のロシア人は良く知られているが、札幌に関しては、次のホームページが参考になる<sup>(4)</sup>。また、主催の富貴堂は北海道の老舗書店で、楽器

も取扱い当時から積極的に音楽文化活動を展開していた。例えば、次の記事は『北海タイムス』に掲載されたレコード鑑賞会の案内である。

今〔10月〕27日（木）午後7時から今井記念館に於て富貴堂楽器部主催で第10回レコード鑑賞会が開かれる〔。〕今回はポリドール11月新譜からワグネル傑作のレコードを中心とし同時に世界独歩のポリファーク吹込レコードの紹介をなす筈で〔、〕無料入場券を同楽器部で受けとられ度いと〔無記名〔北海タイムス〕1927c〕。

また、社史によると、昭和2年（1927）当時は広く事業を拡張し、学校へのピアノや書籍の納入、練習帳の編集・販売も行っていた〔富貴堂〔編著〕1968 68-70〕。



〔図2〕 豊平館

札幌公演の翌日に、「藤原義江氏の歓迎茶会」が豊平館<sup>(5)</sup>で開かれている。藤原は大いに語ったようで、談話が3回に分けて『小樽新聞』に連載されている〔〔藤原義江〕1927a〕、〔〔藤原義江〕1927b〕、〔〔藤原義江〕1927c〕。内容は自伝を交えた音楽観で、日本人と西洋音楽の関係を省察したものである。まず、日本の音楽界を概観し、西洋の歌が中途半端に歌われている現実を指摘する。次いで、海外で日本の歌を所望された経験を披露し、民謡の重要性を説き、日本の歌を大切にすることを主張する。藤原は日本に西洋音楽が広まった原因を、1. 音楽学校における教育、2. ビクターのレコード、3. 亡命ロシア人の音楽活動の影響と考え、特に亡命ロシア人達の民謡が広く日本人達に受け入れられたことに注目する。このような話の後、自分が独唱会で山田耕筰の歌を歌った時に観客が最も熱狂したという経験を話し、音楽化された民謡を歌ったり、無理にシューベルトやベートーヴェンを勉強したりするよりも、都々逸でも勉強する方が世界的歌手への近道ではないだろうかと話をつぶ。

最後の都々逸云々は幾分皮肉を込めたユーモアかと思われるが、日本において西洋音楽は、教育のための音楽から脱皮し、物珍しさでもてはやされていた時代を通り過ぎようとしているという認識と思われる。

なお、この会を主催したのは札幌市民音楽協会であり、藤原義江の来札に伴って設立された組織であった。『小樽新聞』には、「同会の幹事で北海タイムス社佐野本社札幌支社唯是の両氏および富貴堂楽器部へ住所氏名記入の上申込まれたいと〔。〕会費一円は当日持参されたく〔、〕記念撮影をする筈」〔無記名〔小樽新聞〕1927g〕という案内が掲載されている。協会は豊平館での茶会を初回の会合と位置づけようとしていたように見受けられる。

札幌公演を概観したが、万事つつがなく進行したことが判明する。茶会を企画するアイディアも含めて、主催者富貴堂の運営手腕を高く評価することができる。この後、藤原は函館に向かう。



## 2-1-2. 演奏会の広報

当時の札幌・小樽では『北海タイムス』と『小樽新聞』が広く購読されていて<sup>(6)</sup>、藤原義江の演奏会を積極的にサポートしたのが『小樽新聞』であった。昭和2年9月の『小樽新聞』を繰ると、藤原義江リサイタル関連の記事が早くも9月初頭に現れ、その後、畳掛けるように連日続くことが確認できる。

まず、最初の報道は9月2日。大きな写真つきで、本人の言葉を交えて紹介される。内容は浅草オペラでの活躍、ビクター社との契約、人柄、演奏会のプログラムであり、「英国人を父にもつ涙と放浪の足跡 札幌三友館に独唱会を開く天才児 藤原義江氏」という派手な見出しがついている。藤原義江の音楽に併せて、人柄、経歴をも書き込んだ文章は、物見高い人々の興味を惹いたのではないだろうか。「ムツソリニイ首相が『真に東洋を代表する [。] 而して日本の芸術を最もノーブルに紹介するものは我藤原氏あるのみ』と賞賛した」〔無記名〔小樽新聞〕 1927a〕、「彼は日比谷の音楽に9,000人を吸集し戸外リサイタルのレコードを作った」〔無記名〔小樽新聞〕 1927a〕、「彼は咽に世界一を以て誇る紐育生命保険会社と向15ヶ月6万円の保険契約をしてヤンキー共をアツと云はせた」〔無記名〔小樽新聞〕 1927a〕、「英国人を父としてゐる彼の過去は余りにもドラマチックである [。] 母は九州の人 [。] 初回の渡欧の際父を失った彼は [、] 幼時大阪の大火の折別れた母やたつた一人の妹は若しやいきてゐまいかと [、] 未だに尋ねている」〔無記名〔小樽新聞〕 1927a〕という言葉を読んだ人々は、きっと心動かされたに違いない。また、前々日には「藤原義江氏独唱会 素晴らしい人気」という小さな記事が出た。会券（入場券）の売れ行き好調を伝える文章が記されていて、演奏会の大人気がわかる。

テナーの名歌手藤原義江氏の本道における独唱会は十四日先づ札幌の三友館に開催されるので [、] 極度に人気沸騰して前景気も素晴らしく [、] どしどし予約の会券が出るため [、] 早くも当日は満員を予想されてゐるため [、] 希望者は前もって会券を予約する方が安全である〔無記名〔小樽新聞〕 1927b〕。

『小樽新聞』には日本蓄音器商会の広告も掲載される。《かやの木山》《かへろかへろ》、《からたちの花》《子守唄》、《叱られて》《お玉じゃくし》、《まちぼうけ》《鐘が鳴ります》、《鳴の声》《べちか》の5種類のレコードが入手できることが示され、代理店の小樽日畜商会と、三光社、宮本商会、玉光商会、宮崎蓄音器店、マルニヤ薬房、ナルホ堂という販売店が記されている〔無記名〔小樽新聞〕 1927c〕。

翌14日も引き続き会券（入場券）の売れ行き好調を伝える。実際に売れ行き好調なのか、新聞読者を煽っているのか定かではないが、焦りを感じて券の購入に走った人々もいただろう。同記事には突然の小樽公演の中止も報じられている。

われ等のテナー藤原義江氏の来道は俄然本道好楽家の人気を沸騰してゐるが [、] 今日までに確定した予約演奏は14日富貴堂主催の札幌（三友館）と16日古屋楽器店主催の函館（巴座）の二ヶ所で [、] 15日の予定であつた小樽市の演奏は中止と見られてゐる [。] 従つて札幌は小樽を初め遠く旭川方面からの予約申込で開会前すでに満員を予測され [、] 函館も前売切符の売れ行素晴らしく [、] 未曾有の好景気を呈している〔無記名〔小樽新聞〕 1927d〕。

「旭川方面」という個所から、遠方からの聴衆もいたということがわかる。藤原の日記によると、樺太からの来場もあったようだ：「今夜の入場者の中には遠くは樺太から近くは小樽、旭川からの団体もあるときき、うつかり旅の気持ちではゐられぬと思つた」（藤原 1928: 137）。豊原（現在のユジノサハリンスク市の一部）から札幌まで直線距離にして450キロメートル程度<sup>(7)</sup>。当時稚内とサハリン<sup>サハリン</sup>の南端に位置する大泊<sup>コルサコフ</sup>を移動するのに連絡船で9時間、稚内から札幌まで汽車で15時間30分かかった。もちろん乗り換えの時間は含まれず、また旅費を思い浮か

べるならば、音楽愛好家の演奏会にかけると大変な情熱を推し量ることができる。

演奏会当日の記事も余念がない。「藤原氏独唱会<sup>〔いよいよ〕</sup>愈々今夜札幌」という見出しで、両演奏家の急行による札幌到着と、シャピロ氏のプロフィール、それからプログラムが写真入で報じられている。「当日地方の来会者には別席を設けた外小樽席<sup>〔8〕</sup>まで特設して優待してゐる」〔無記名〔小樽新聞〕 1927e〕という記述から、予定していた枚数以上の入場券を発行せざるを得なくなったようだ。

振り返ると演奏会の状況を的確に伝える報道を認めることができる。

### 2-1-3. 運営、企画

藤原のマネージャーは塚本嘉次郎だった。藤原の回顧録の言葉を借りるならば、「おもしろいように金が入ったのだが、また使うこともよく使ったので、山野楽器店の主人の山野正太郎が『藤原にはちゃんとしたマネージャーをつけてやらなければ……』といて、山野の店員をしていた塚本嘉次郎という人を私のマネージャーにつけた」という経緯で組んだ人物であった。〔藤原 1984:52〕有能で、藤原は「ただ舞台に出て、口を開いていさえすればよかった」〔藤原 1984:53〕。他方、塚本も『君は金を持ってはいけない。芸術家が金銭とか出演料をどうのこうのするのはよくない』と日ごろからいっており、私自身は、いくら金が入ったのか知らされなかったものである。その代り、ホテルの払いからデパートの買物まで一切支払いはあなたまかせでいられた」〔藤原 1984:53〕という状態だった。藤原は演奏会の運営——特に会計から切り離されていた。

札幌公演の際には、主催者の富貴堂に挨拶したり、社交の場もあったようだが、『からたちの実』所収の「唄日記」を探しても塚本の名前は出てこない。青森公演の後も、「音楽会がすんでから2人は時事新報の佐藤氏の案内で浅虫温泉へ急いだ」〔藤原 1928:142〕という記述があり、この時シャピロと行動を共にしていたので、塚本がこの時に同一行動をとっていなかったことが判明する。

運営面でしばしば姿を現すのが富貴堂である。そして、主催者の重責を果たしたのが店主の中村信以である。明治31年に富貴堂を開業、一代で北海道を代表する書店にまで会社を育てあげた立志伝中の人物で、音楽との繋がりは、先に述べた通り学校への楽器納入を通じた多角経営によるものであった。書物の通信販売や楽器の月賦販売など新しい試みを積極的に行う新進の気質に富む人物で、藤原義江の演奏会もこれに関連すると考えられる。

### 2-1-4. 当時の札幌の音楽文化——演奏会、ハーモニカ、管弦楽

当時の札幌の音楽文化は一体どのような状況だったのだろうか。札幌は早くから西洋音楽の普及が見られる。『北海道音楽史』〔前川 2001〕には、明治期から積極的に西洋音楽を受け入れてきたことが記されているが、昭和2年（1927）の秋の札幌は、まさにこの蓄積を土台に音楽文化が花開こうとしていた時であった。再び『小樽新聞』と『北海タイムス』に戻り、札幌を中心に北海道の音楽文化を描き出してみたい。

藤原義江のリサイタルの翌10月16日に行われたのが、新日本音楽の演奏会であった。会場は今井記念館。プログラムと奏者は次の通りである。

▲民謡 咲いた桜、出船の港、関の夕ざれ、青いすすき

▲童謡 鶯の夢 雨ふりお月（佐藤千夜子独唱）（ピアノ伴奏）

▲コスモス、春の風、珠と鈴、紅そうびせまれい（佐藤千夜子独唱）（尺八伴奏）

▲谷間の水車、春のおとづれ、小川のほとり、かもめ、子守唄（尺八吉田晴風独奏）（箏伴奏）

▲外 君が代変奏曲、清水楽、夜の大工さん、蜂、若水、春の夜、和風楽、軒の雫、秋の調、寒月。

（吉田晴風夫妻、佐藤千夜子、札幌邦楽会の藤澤鈴昭、畑中康山、中徳検校、渡辺輝里井、横山光喜勢、竹中賀壽井師等賛助出演）

〔無記名〔北海タイムス〕 1927b〕。

この演奏会に関してはデータが少なく、残念ながら詳細は不明である。しかしながら、プログラムから洋楽器と邦楽器を用いて地域の音楽家が共に演奏会を開催していることが指摘できる。また同じく10月には立松房子独唱会も開かれている。23日函館、24日札幌、25日旭川、26日帯広、27日室蘭、28日小樽という日程である〔無記名〔北海タイムス〕1927a〕。

同時期にヴァイオリニストのエルデンコの演奏会も行われた。スケジュールは、9月22日に函館、25日に小樽。主催は小樽新聞社である。したがって、この時期の新聞紙面は『北海タイムス』が立松房子演奏会関連の記事で埋め尽くされているのに対して、『小樽新聞』はエルデンコの記事で埋め尽くされている。ただしエルデンコのリサイタルは札幌では開催されず、小樽ではそれなりの入りであったらしい。『小樽新聞』によると、「前年のボリス、ラッス以上の名手を迎へたにも拘らず準備に遺憾の点多く宣伝に徹底を欠いた為〔、〕会場八分の聴衆であった」〔無記名〔小樽新聞〕1927j〕。しかしながら、二つの演奏会が重なったことも、留意する必要がある。なお、エルデンコの演奏会については次のような記事もある：「これ等は殆ど札幌の好楽家をもつて網羅し〔、〕熱心に同氏の妙技を鑑賞し〔、〕曲の終るごとに起る拍手は場の内外を押し〔、〕殊に《スペイン交響曲》《スラブダンス》《ロシアの謝肉祭》等は深い感銘を与えた」〔無記名〔小樽新聞〕1927j〕。

聴衆は少ないが、会場は熱気に包まれていたようである。

北海道在住のアマチュア音楽家達も活発な音楽活動を展開している。『小樽新聞』、『北海タイムス』から拾っていくと、9月17日に堺青年団演奏会、また同じく9月17日に札幌師範学校において桃太郎会による「舞踊と童謡」、9月24日に札幌師範学校ハーモニカ演奏会、9月30日に庁立小樽中学音楽部の定期演奏会、10月1日に小樽電気館において舞踊音楽会、11月20日に〔札幌〕ハーモニカソサイテーター主催ハーモニカ演奏会という具合である。「ハーモニカ」という文字が目立つが、当時札幌や小樽ではハーモニカが大流行していた。また、ヴァイオリンやマンドリンの演奏会も散見される〔無記名〔小樽新聞〕1927i〕及び〔無記名〔小樽新聞〕1927k〕。

その他、北海道帝国大学には大正期から始まった二つの管弦楽団があり<sup>9)</sup>、随時演奏会を開催していた。昭和2年(1927)の秋は三つの演奏会が開催されている。10月31日の札幌シンフォニーによる試演奏会兼栃内氏送別会および、11月9日の同じく札幌シンフォニーによる第3回発表会、続いて11月22日に文武会による第10回公開演奏会である。ちなみに両者は後に戦時体制下で統合され北海道大学交響楽団となった。

11月9日の札幌シンフォニーの演奏会に関して、北海道大学交響楽団の年史には次のような回想がある：

11月9日には三友館で待望の第3回発表演奏会が開かれた。ベートーベンの100年記念として、曲目には「運命」全楽章、第7交響曲第3楽章、オーケストラの伴奏で井口教授の夫人井口春子のピアノ独奏でベートーベンの第1ピアノ司伴奏を選び、他にビゼーの「カルメン」等が加えられた。何れも数年来手がけたレパートリーなのでまず満足すべき出来栄で、しかもひさしぶりの公開演奏会でもあったので、第2回にも劣らず盛会で、好評であった。この年以後オーケストラは毎年秋に定期演奏会を開くことになった〔伊藤 1971：150-151〕。

北海道のオーケストラ運動も、昭和2年(1927)が一つの節目であったことがうかがえる。

もちろん邦楽の演奏会も活発で、9月17日に札幌箏琴温習会、9月24日に山田流琴曲秋季温習会、10月2日に札幌三曲演奏大会、10月29日に都山流温習会、10月30日に長唄と久さ会、11月21日に小樽歌澤会という具合であった。

札幌や小樽の音楽文化を概観したが、邦楽から洋楽まで、外来演奏家や地域のアマチュア音楽家が入り乱れて華やかな演奏会活動を繰り広げていることが確認できる。特に北海道帝国大学における管弦楽は高度な音楽知識を持った人々の存在を示している。

## 2-2. 盛岡

### 2-2-1. 演奏会の状況

日記には「17日朝諸君におくられて連絡船に乗る」（藤原 1928: 137）と記されている。札幌に続いて函館公演を行った後、9月17日朝7時20分発の連絡船に乗り、11時50分に青森に到着したと考えられる。また、「〔青森での〕音楽会がすんでから2人は時事新報の佐藤氏の案内で浅虫温泉へいそいだ。途中山道で二度も自動車がパンクをしたので、宿へ落付いたのは1時をまはつてゐた」（藤原 1928: 137）と日記にあるので、予定を変更して青森の浅虫温泉で1泊、浅虫駅を18日早朝6時44分に出発、盛岡駅に18日昼12時46分に着いたようだ。同日午後2時リサイタル開始。午後5時終了。同日午後7時から夜の部の開始という大変な強行軍であった。

公演は大盛況だった。第1回目に関して次のような新聞評が出ている：「満場立錫の余地もない盛況振りを示した——中略——プログラムのすすむにしたがつて聴衆は吾等のターナーにチームされ5時閉会」（無記名「岩手日報」1927b）。

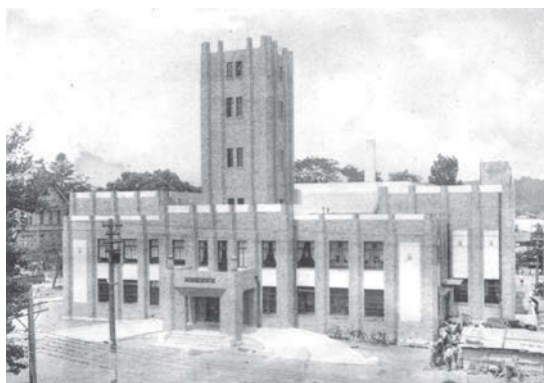
### 2-2-2. 演奏会の広報

演奏会の報道は幾分少なく、宣伝もやっと9月14日になってからで、演奏会の4日前が第一報であった。

おそらく、理由の一つは主催が愛国婦人会岩手支部によるということがあったかもしれない。というのも、演奏会に関する新聞報道は、概して自社企画に手厚く他社企画に冷淡な傾向があるからである。あるいは、岩手日報社が高勇吉のチェロ演奏会を主催し、開催日が9月13日だったことも関係していると思われる。日程を考えると、高の演奏会が終るまでは藤原義江の報道を差し控えていたようにも見受けられる。だが、逆に言えば、昭和2年（1927）の秋における盛岡の音楽活動はそれほどまでに活発であった。

そもそも盛岡は、大田クワルテットの活動や師範学校や女学校における活発な音楽活動、あるいは武田忠一郎による民謡採譜に示されるように、早くも大正期から西洋音楽が楽しまれていた。これに加えて昭和2年（1927）に岩手県公会堂が完成し、一気に演奏会文化が花開いたのである<sup>(10)</sup>。

建坪478坪、6階建の堂々たる建物で、総工費438,000円。2年弱の歳月をかけて完成された。設計者は佐藤功一。早稲田大学大隈記念講堂の設計者として知られる建築家である。



〔図3〕 岩手県公会堂

公会堂の柿落としから行われた公演は次の通りである。



6月19日	落成式
6月25日	照井氏音楽大演奏会（照井榮三、赤澤長五郎、瀬川良隆、榊原直、武岡鶴代）
6月26日	宝生流謡曲大会
7月2日	盛岡中学校音楽クラブ主催第2回ハーモニカ演奏会
7月23日	童話劇公演会（岩谷小波）
7月24日	早稲田大学音楽部管弦楽大演奏会（佐藤美子）
8月7、8日	北村児童歌劇公演会（北村季晴）
8月8、9日	築地小劇場
8月10日	純真薩摩琵琶有馬氏独演奏会
8月21日	観世元滋の謡と舞
9月3日	盛岡市柵南少年団和洋音楽会
9月11日	高勇吉セロ独演奏会
9月18日	藤原義江氏演奏会
10月2日	筑前琵琶大会（山根旭線）
10月8日	錦心流琵琶吾水会支部設立1周年記念大演奏会
10月22日	東洋音楽学校合唱団並びに弦楽大演奏会
11月19日	口笛演奏会（金野嘉雄）
11月26日	盛中ハーモニカバンド第3回演奏会

招待演奏家や地元の音楽愛好家による演奏会や舞台が繰り出される。声楽家の照井榮三、武岡鶴代、佐藤美子や藤原義江、ヴァイオリニストの赤澤長五郎、チェリストの高勇吉、ピアニストの瀬川良隆や榊原直、早稲田大学管弦楽団、東洋音楽学校と驚くべき豪華さである。日本音楽も同様で、立て続けに行われる琵琶の演奏会に加えて観世元滋<sup>(11)</sup>の来盛があった。

### 2-2-3. 運営

「唄日記」における盛岡公演の記述は少ない。おそらく、大変な強行軍であったことと、風邪をひいたことが原因だったのかもしれない。「唄日記」における翌日に骨休めした花巻温泉の記述の中に「盛岡の後始末をして来た塚本君がついた」〔藤原義江 1928：144〕という記述がある。ここでマネージャーと行動をともにしていることがわかる。

束の間、塚本とピアニストのシャピロがともに街に出かけた際に、藤原は「唄日記」に、「2人が町へ降りて行つてから、私はひさしぶりに、本当にひさしぶりに一人になった」〔藤原義江 1928：144〕と記し、自分の将来についていろいろ思いを巡らす。「歌手の生命、殊に華やかなテナー歌手の生命、と言ふより人気は、いつたいどれ位までつづくものか。第一この先自分の喉は、どの辺までのびるものか。今が頂上か、それとももう下り坂か。馬鹿な、そんなことはない——中略」〔藤原義江 1928：145〕。

独白の最後は将来への希望で終わる。新聞報道ではギャラントな藤原が描き出されていたが、これと相容れない繊細な側面が見られる。

### 2-2-4. 当時の盛岡の音楽文化——演奏会、ハーモニカ、弦楽、合唱、レコードコンサート

盛岡の音楽文化は実に多彩なものであった。例えば、9月3日に盛岡市柵南少年団による演奏会が行われてい

る。プログラムは次の通りである。

- |   |                          |
|---|--------------------------|
| 曲目  | (ロ) 序曲天国と地獄 (オツフエンバッハ)   |
| 1. 開会 小原団長  | 7. 琴曲河水清 (今井先生作曲) 斗ヶ澤成子  |
| 2. 合奏 杜陵 <sup>とりょう</sup> <sup>(12)</sup> ハーモニカバンド | 休憩                       |
| (イ) 少年団歌 (山田耕作作曲)                                 | 8. 楽曲星の暁 琴 斗ヶ澤成子 都山流尺八 増 |
| (ロ) 祝婚行進曲 (メンデルゾーン)                               | 子溪雪、甘利甫檣                 |
| 3. 箏曲 夕顔 箏 斗ヶ澤成子、都山流尺八 増子                         | 9. 琵琶乃木將軍 新藤□水           |
| 溪雪 甘利甫檣   | 10. 童謡月見草 唄 小山こ□子 踊 斗ヶ澤敏 |
| 4. 琵琶白虎隊 速畑洵□                                     | 11. 合奏 杜陵ハーモニカバンド        |
| 5. 童謡かもめ 唄 小山こ□子 踊 斗ヶ澤敏                           | (イ) わすれな草 (マクベツ)         |
| 6. 合奏 杜陵ハーモニカバンド                                  | (ロ) 歌劇カルメン抜粋 (ビゼー)       |
| (イ) サンチャゴワルツ (コルビン)                               |                          |

〔無記名〔岩手日報〕 1927a〕

近世邦楽、琵琶の音楽とハーモニカ、唱歌という曲目である。現代ではおそらく組まれることはないプログラムだが、広く流行っていたものを順にプログラムに組み込んでいったのではないだろうか。そして、邦楽と洋楽の混成プログラムは、曲目によって聴衆が入れ替わる可能性があまり無いことを示しているのも、誰もが洋楽と邦楽を楽しんだことが浮かび上がってくる。

町村部で開かれた演奏会においても、同様の傾向を見て取ることができる。例えば11月13日に一関町小松館で開かれた一関音楽クラブ主催の演奏会では、次のような曲目が演奏されている。

- |                               |                            |
|-------------------------------|----------------------------|
| 第1部                           | 第2部                        |
| 1. ハーモニカ合奏 君が代マーチ             | 1. ヴァイオリン二重奏 ザデザートキャラバン    |
| 2. レコード                       | 2. レコード                    |
| 3. ハーモニカ独奏 スパニッシュニューヨーク       | 3. ハーモニカ合奏 ザビューオブセト        |
| 4. ヴァイオリン 重奏 メヌエット            | 4. ヴァイオリン独奏 (イ) ウォーターローの激戦 |
| 5. ハーモニカ合奏 アメリカンパトロール         | (ロ) グノーのセレナーデ              |
| 6. レコード                       | 5. ハーモニカ二重奏 (イ) アルゼンチンタンゴ  |
| 7. ハーモニカ二重奏 キャラバン             | (ロ) 愉快的鍛冶屋                 |
| 8. ヴァイオリン二重奏 オールドフオックス、アットホーム | 6. レコード                    |
| 9. ハーモニカ独奏 越後獅子               | 7. ハーモニカ独奏 トラバトーレ          |
| 10. ハーモニカ合奏 アンダーザダブルイーグル      | 8. ハーモニカ二重奏 数へ唄            |
|                               | 9. ヴァイオリン独奏 G線上のアリア        |
|                               | 10. ハーモニカ合奏、軍艦マーチ          |
- 〔無記名〔岩手日報〕 1927d〕

楽器に関しては洋楽器ばかりだが、プログラムの中に《越後獅子》と《数へ歌》を見出すことができる。一関においても和洋折衷はそれほど抵抗が無かったようである。あるいは、同月19日に開催された水沢女子青年団主催第1回郷土芸術大会における演奏曲目は次の通りである。

第1部

1. 琴三味線合奏 三番叟
2. □部合唱 1. 漁火 2. 門の椎の木
3. ハーモニカ二重奏
4. マンドリン合奏 1. 鬼の踊 2. 夜の巡邏
5. 琴尺八合奏 松上の鶴
6. 独唱
7. 薩摩琵琶 石童丸
8. ハーモニカ□重奏
9. 独唱 ロシヤの民謡

1. シテンキラージンの丸木舟

2. 鍛冶屋の唄

1. ジョセランの子守唄 2. 子守唄

第2部

10. マンドリン合奏
11. 落語
12. 尺八琴合奏
13. ヴァイオリン独奏
14. 仕舞 船弁慶 経政 玉葛 花月 大江山  
紅葉狩 居囃子胡蝶

〔無記名〔岩手日報〕 1927g〕

この演奏会でも箏、三味線、ハーモニカ、マンドリン、尺八、琵琶、そして唱歌と仕舞という地域の音楽文化を一堂に集めたプログラムが組まれている。おそらく音楽に関する同様の考え方で演奏会が行われていると判断できる。なお、新聞記事には「出演者は黒女校<sup>(13)</sup>の武田<sup>(14)</sup>教諭武田すみ子嬢山内文雄氏等」〔無記名〔岩手日報〕1927e〕という簡単な紹介があり、演奏者のプロフィールもわずかであるが判明する。武田忠一郎は東北の民謡研究で大きな業績を遺したことで知られているが、地域の音楽会でも活躍していたようである。ただし、詳細は充分なプログラムの検討を待ちたい。なお、ここまで三つの演奏会を取り上げてきたが、概観するとハーモニカが目立つ。当時の岩手では普及が著しかったことがうかがわれる。

演奏会はまた学校主催によっても行われた。高等女学校や中学校（旧制）、商業学校や農林学校は授業や有志によって全国的に音楽が盛んに行われたが、盛岡においても例外ではない。盛岡高等農林学校でも11月12日に演奏会を開催していて、同校第1講堂で開催された演奏会のプログラムは次の通りである。

第1部

開会 合奏 校歌

1. 合奏マンドリン 六段
2. 同ヴァイオリン、セロ ゼウエット、トラバトール
3. 同ハーモニカ 小さな支那人
4. 同尺八（琴古流）千鳥の曲
5. 独奏ヴァイオリン プラムスの子守唄
6. 同マンドリン コーロギの舞ひ
7. 2部合唱 秋の思
8. 同尺八（都山流）若葉
9. ヴァイオリン インディアンラメント
- 〔10.〕 重奏ハーモニカ（イ）ベニスの船歌  
（ロ）カルメンの抜すゐ

10分休憩

第2部

1. ハーモニカ 砂漠の隊商
  2. 同マンドリンダニユープのさざなみ
  3. 同尺八（都山流）深夜の月
  4. 独唱 出船
  5. 独奏 ヴァイオリン ハンガリアンダンス
  6. □重奏 マンドリン風の結婚
  7. 合奏 ハーモニカ 祝婚行進曲
  8. 独唱 春に寄す
  9. ヴァイオリンジョセランの子守唄
  10. 合奏尺八（琴古流）嵯峨の秋
- 閉会

〔無記名〔岩手日報〕 1927c〕

この演奏会でも、和洋の曲目が混在が見られ、マンドリン演奏の《六段》、セロ、ハーモニカ、ヴァイオリン、マンドリン、尺八。実に様々である。

もっとも、和洋折衷の傾向があまり当てはまらない演奏会もあり、例えば岩手師範学校の演奏会や盛岡高等女学校の演奏会である。例えば次のプログラムは11月19日に盛岡高等女学校の講堂で開かれた演奏会のものだが、合唱、ピアノ曲、ヴァイオリン曲といった現在の私達がよく目にする西洋音楽のプログラムが組まれている。

#### 第1部

- |                 |                |                               |
|-----------------|----------------|-------------------------------|
| 1. 君が代          | 2. 合唱 可愛い帽子    | 3. 独唱 秋を□る                    |
| 4. ピアノ独奏 人形の目覚め | 5. 独唱 思い出      | 6. 二部合唱 帰る雁                   |
| 7. ピアノ独奏 ソナチネ   | 8. 合唱 銀笛       | 9. 独唱 白ばら                     |
| 10. ピアノ連弾       | 11. 三部合唱 峠を越へて | 12. 独奏 五月雨                    |
| 13. ピアノ独奏       | 14. 合唱 鳩       | 15. バイオリン合奏                   |
| 16. 独唱 亡友を思ふ    | 17. 合唱 祝頌の歌    | 18. 来賓品 <sup>[ママ]</sup> ピアノ演奏 |

#### 第2部

- |                           |                |                 |
|---------------------------|----------------|-----------------|
| 1. 三部合唱 春興                | 2. 独唱 別離       | 3. 合唱 月光る夜      |
| 4. ピアノ独奏 ソナチネ             | 5. 独唱 青い小鳥     | 6. 合唱 故郷の花      |
| 7. 独奏 後 <sup>(15)</sup> 寛 | 8. 合唱 鎌倉懷古     | 9. ピアノ独奏 湖上の舟遊  |
| 10. 独唱 難破船                | 11. 二部合唱 おくれ時計 | 12. ピアノ独弾 村のダンス |
| 13. 三部合唱 我郷               | 14. ピアノ独奏      | 15. 二部合唱 夜想     |
| 16. 四部合唱 羽衣               | 17. 来賓バイオリン独奏  | 18. 校歌          |

〔無記名〔岩手日報〕 1927h〕

ピアノ曲と声楽曲中心なのが一瞥してわかる。残念ながらピアノ曲など作品名や作曲家名が記されていないので詳細は不明だが、《帰る雁》、《白ばら》、《俊寛》、《我郷》は、永井幸次と田中銀之助が編集したN.T楽譜に収録されている作品である。なお、当時、音楽科は新藤武が担当しており<sup>(16)</sup>、意欲的な音楽教育が展開されていた。

最後に昭和2年11月22日(1927)に盛岡で最初のレコードコンサートが開かれたことを記しておきたい<sup>(17)</sup>。主催は盛岡聖公会青年会というキリスト教団体である。一般にも開放され、再生されたのは次のような曲目であった。

#### 第1部

1. オーケストラ『ダニブの漣』(インターナショナル管弦楽団)
2. ヴァイオリン『東洋の情話』リムスキー作曲(クライスラー)
3. アルト『ミネトカン河畔にて』(シューマンハインク)
4. テノール『ヴォルガの舟唄』ロシヤ民謡(藤原義江)
5. 同イ『鳶のお昼寝』野口雨情詩 ロ『新入生』北原白秋詩(同)
6. オーケストラ『ハンガリアンラブソデー』リスト作其の1、及び2(フィラデルフィヤ大交響楽団)
7. ピアノ『ハンテングソング』メンデルズーン作曲(チャーカツスキー)
8. ソプラノ『アベマリア』(ボンセル)
9. テノール イ.『荒城の月』ロ.『沖のかもめ』(藤原義江)
10. 喜劇『ボツソザフーズ』(サーハリーラウダー)

#### 第2部

1. オーケストラ『オーバーザウエーブス』(インターナショナル管弦楽〔団〕)
2. 童謡イ.『こほろぎ』ロ.『虹と小うま』(河原秀子)



3. 琴『磯千鳥』（吉田晴風）
  4. 高峯琵琶『川中島』全曲（高峯筑風）
  5. 三重奏『単順の表情』トーマ作曲（ネアポリタントリオ）
  6. 合唱『トラバトーレの鍛冶屋の合唱』（ビクター混声合唱団）
  7. マンドリン『ボレロ』カラーチェ作（ラファニエルカラーチェ）
  8. テノール『幼き救世主』（マーチネリー）
  9. 同イ．『此の道』北原白秋詩口．『麦打の唄』（伊太利民謡 藤原義江）
  10. オーケストラ『ウインナの森の物語』ストラウス作曲（ヒラデルフィア大交響楽団）
- 終曲『ハレルヤコーラス』（ビクターオラトリオ合唱団）

〔無記名〔岩手日報〕 1927i〕。

《幼き救世主》、《ハレルヤコーラス》など、宗教色が目立つが、琵琶や箏曲などここでもまた非常に幅広いジャンルの音楽が演奏されていることが指摘できる。藤原義江による歌曲が幾つもプログラムに含まれていることも、興味深い。彼が盛岡でも大人気であったことを再確認できる。残念なことに演奏会の実施状況は分からないが、多くの人々が詰めかけたのではないだろうか。

なお、盛岡で蓄音器の導入が始まったのは、明治の末頃である。大正期になると徐々に普及し、中頃には「各商店では浪花節や端うた、唱歌、流行歌等各自、自慢の種板をかけ、道行く人々の足を止めた」〔無記名〔岩手日報〕 1927j〕らしい。ただし当時は、「此時代は、蓄音機万能時代で最も華にもてはやされたかホンの線香花火式で少しの堅実さもなかった」〔無記名〔岩手日報〕 1927j〕ようである。しかしながら、昭和2年（1927）になると普及著しく、「今盛岡にある蓄音機は1000台に上り〔、〕蓄音機屋さんは5軒」〔無記名〔岩手日報〕 1927j〕あり、「種類は、ビクター日本蓄音機商会、合同蓄音機商会の物が行きわたり、稀にスキツツル製<sup>(18)</sup>もある」〔無記名〔岩手日報〕 1927j〕ほどだったらしい。

幾つかの演奏会プログラムを概観したが、昭和2年（1927）の盛岡やその周辺では和洋の音楽が盛んに演奏され、特にハーモニカをはじめとする器楽の充実が著しいことが指摘できる。あるいは女学校は、そこだけ別空間のように合唱を中心とする高度な西洋音楽が演奏されていることも指摘できる。

## 2-3. 秋田



〔図4〕 秋田記念館

### 2-3-1. 演奏会の状況

花巻（岩手県）から秋田へはまる一日かかった。朝出発し、「途中で3度乗りかへて秋田駅に着いたのは4時」（藤原 1928: 148）。到着後、旅館で一休みし、演奏会に備えたいらしい。なお、『秋田魁日報』には、「氏及び近衛氏

マネージャ等は本日午後4時24分下り秋田駅着の列車で来秋〔、〕直ちに石橋旅館に入る予定〕〔無記名〔秋田魁新報〕1927e〕と出ている。

演奏会は午後7時開始。この地でも大盛況であった。翌日の新聞は次の如く会の様子を伝えている。

二十日夜六時会場記念館ではすでに約千人の学生団体や秋田の藤原ファンが目白押しの有様で主催者側〔は〕てんてこ舞させるすばらしさである（。）定刻七時から五分おくれて憧れの藤原氏がタイシャ色<sup>(19)</sup>ガウンに包まれていと秀麗な姿を会場にはこんだ、この時堂にあふれる聴衆実に千八百余——中略——われらのテナーがステージに立つと拍手の波はしばしやまず、<sup>やが</sup>聴て第一部ラルゴが唄はれた、秋田のファンを魅す最初の声である、金鈴のやうな美しい声、これが肉声であらうか、ジロメツタの叙情調で二部に移つた、聴衆はかたづをのんで陶醉するばかりである〔無記名〔秋田魁新報〕1927g〕。

多くの聴衆が聴き入っていたことがわかる。また、藤原も秋田公演を大変満足していたようで、翌朝の談話でつぎのように話している。

昨夜程調子がよく出来たことはめつたにない、この度日本に帰つて来てから第一番の出来でした、風邪をひいて出来がわるいかも知れないと御社の主筆に挨拶して頂きましたのが、あべこべでした、それと云ふのは風邪をひいてゐると思つたので声の出し方に心を使つて注意したからです、カルメンなんか実際我ながらよく出来た。感心した位です、全くあんな風に調子よく出来たことはなかつた、うれしかつた、うれしかつた〔〔藤原義江〕1927f〕。

### 2-3-2. 演奏会の広報

多くの聴衆は秋田における西洋音楽の人気を感じさせるものであり、主催の『秋田魁新報』<sup>(20)</sup>の報道も極めて充実したものであった。順に追ってみると、第一報は9月8日。『『我等のテナー』藤原義江氏本社主催で近く大独唱会開催』という見出しで、次のように伝える。「氏は近く全国を巡回の上再び外遊する由にてこの世界的な日本の誇るべき歌手をして本県を素通りさせるのは文化の程度が進んでいる本県としてはこの上ない恥辱がないといふので東京時事新報後援の下に本社にてはこれを主催し近く一大音楽会を催すことになつた」〔〔藤原義江〕1927b〕。

文化都市としての誇りを読み取ることができる。翌々日から始まるのが、石田直太郎による連載である。『『我等のテナア』藤原義江のこと』という5回連載と、「指揮者としての近衛さんのこと」という3回連載から構成されていて、藤原義江に関しては、5,430字、近衛秀麿については3,405字という長大なものである。内容は両者の人と音楽についてであり、伝記、エピソード、近況など、音楽の専門的な知識が無くとも楽しめる内容になっている。また、その合間に差し挟まれるのが、宣伝と曲目紹介である。

# 酔へよ！

## 藤原氏の歌に

我らのテナアを迎える二十日の夜

曲 目

我が日本が生める世界的名歌手に列し恐るべき天才として歌米の樂壇を席巻させ限りなき榮譽を貰つて歸朝した藤原義江氏獨唱會は屢報の通り来る二十日に開かれるが、これの發表となすや、再び得難きこの機を逃さず我等がテナアの驚異すべき藝術に酔ふんとして市はもとより郡部に於ても沙の様なセンセーションをまきおこしてゐるか、曲目は次の通りである。

<b>第一部</b> (一)ラルゴ……………ヘンデル (二)すみれ……………スカラツチ (三)子守唄……………ブラームス (四)我れ夢に泣けり…シユウマン (五)東方の歌……………リムスキ・コルサコフ (六)ジロメツタ……………シビラ	<b>第三部</b> (一)新子守歌……………山田 耕作 (二)待もほうけ……………同 (三)箱根八里は……………同 (四)鐘が鳴ります……………同 (五)からたちの花……………同 (六)船頭の歌……………伊藤 祐司 (七)出帆の歌……………中山 菅平
<b>第二部</b> (一)歌劇「リゴレット」……………第一幕より…ウエルトイ (二)歌劇「マノン・レスコー」……………アチニ (二)歌劇「カルメン」の中より……………ビゼエ	<b>第四部</b> (一)庭の千草……………ムウア (二)ヴォルガの船唄……………ロシア民謡 (三)麦打の歌……………ヴェニス民謡

〔図5〕 秋田公演の広告（演奏曲目）

九月二十日午後六時開場  
 日 時  
 會 場  
 記念會館

**日本の誇り！世界的テナー**


**藤原義江氏獨唱會**

伴奏 近衛秀麿子

會券 椅子席貳圓、座席壹圓五拾錢、學生七拾錢

主 催 秋田魁新報社  
 後 援 時事新報社  
 引 前 賣 券 販 賣 所

大町二丁目三光堂、大町二丁目石川商店、大町白根番屋、廣小野新番屋、大町大島商店、同大内番屋、大町成昌商店、長町朝日堂、長町刈田誠文、長町大島商店、長町大島商店、長町大島商店



九月二十日午後六時開場  
 日 時  
 會 場  
 記念會館

**日本の誇り！世界的テナー**

**藤原義江氏獨唱會**

伴奏 近衛秀麿子

會券 椅子席貳圓、座席壹圓五拾錢、學生七拾錢

主 催 秋田魁新報社  
 後 援 時事新報社  
 引 前 賣 券 販 賣 所

大町二丁目三光堂、大町二丁目石川商店、大町白根番屋、廣小野新番屋、大町大島商店、同大内番屋、大町成昌商店、長町朝日堂、長町刈田誠文、長町大島商店、長町大島商店、長町大島商店

〔図6〕 秋田公演の広告（顔写真）

図版左が曲目紹介、右が演奏会案内である。この顔写真付の広告と曲目案内が幾度も幾度も反復される（図版参照）。広告は9月13日、15日、17日、18日、19日、20日に、曲目紹介は、9月15日、16日、17日、19日という頻度であり、新聞を開けば何か演奏会関連の記事が掲載されているほどである。

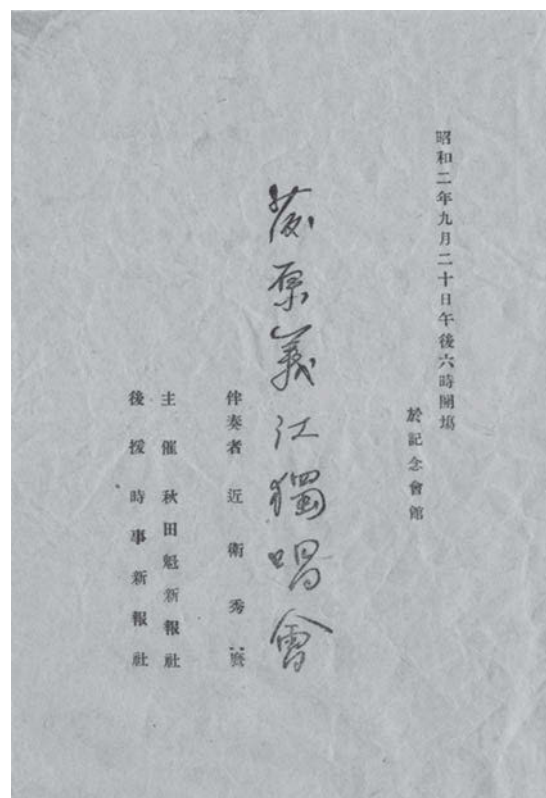
これだけ頻繁に広告が続くと、西洋音楽に興味を持つ人々はオペラのアリアや西洋歌曲をみて、日本音楽に興味を持つ人々は民謡プログラムを見て、少し出かけてみようかという気持ちになったのではないだろうか。演奏会案内には併せて前売券発売所も記されている。町の蓄音器店や書店で次の通りである：大町2丁目三光堂、大

町2丁目石川書店、大工町白根蓄音器店、広小路新為蓄音器店、同木内雑貨店、茶町成見書店、長町朝日蓄音器店、長町荻田誠文堂、長町大島商店東店、楡山運動場前鈴木文房具店。町の多くの商店で入場券を取り扱っている。このチャンネルからも演奏会が話題にされたと考えられる。

演奏会の数日前になると準備にも一段と熱が入る。次の記事は、花輪を贈る試みとプログラム作成についての状況である。

本社主催の藤原義江氏の独唱会は一度発表するや〔、〕好楽家連は『本当か〔、〕嘘ではないか』と驚異の目をみはる有様で〔、〕今更世界的などといふおざなりの説明を加へるまでもなくその盛名はあまねく知られてゐる程であるが〔、〕此の挙に賛し市中中通町白根蓄音器店にてはこれを記念すべく未だ嘗て秋田のどの会合でも催しでも使つたことのない程立派なプログラムを特製し会員に配る外〔、〕藤原氏へは直径4尺<sup>(21)</sup>といふこれも珍らしい大きい花輪を贈ることになり〔、〕既に出来し<sup>しゅったい</sup>同店頭<sup>しゅったい</sup>に飾つてある〔無記名〔秋田魁新報〕1927c〕。

図版が<sup>くだん</sup>件のプログラム。赤い潇洒なもので4ページから成り、図版は最初のページ。2ページ目と3ページ目にプログラムが掲載されていて、最後のページは裏表紙が白根蓄音器店の広告になっていて、藤原義江のレコードが紹介されている。プログラムの作成を買って出たのは、宣伝効果という一面もあったと考えられる。



〔図7〕 秋田公演のプログラム

さて、再び新聞記事に戻ると、9月16日には「のどに保険六万円！ ……全てが僕の恋人だ ……若き女性が憧れの的」と題したゴシップ集が掲載される。あるいは、直前には、歌詞と曲目解説が掲載される。紙面を藤原義江の記事で埋め尽くし、過剰に発信することで演奏会に収束する言葉の渦を作り出すかのような宣伝である。



このようにして演奏会を迎えるわけであるが、演奏会の後も記事は続く。批評が掲載されるのである。併せて3本、まず9月27日に阿曾村秀一、次いで10月1日に山縣茂太郎、最後に10月2日と4日に深井史郎の連載が続く。

阿曾村は後に『秋田魁新報』の主筆として活躍した人物。当時学生で、郷里に帰省中であった。山縣は秋田師範学校の教員。後に多くの音楽理論書を執筆している。そして深井は——解説の必要がないかもしれないが——後に日本を代表する作曲家の一人となったあの深井史郎である。第七高等学校卒業後、郷里の秋田に戻って結核を療養していた。

阿曾村は、郷里で演奏会が楽しめる喜びを記したあと、藤原義江がアカデミックな人々からも大衆からも支持されていることを指摘し、しかし、藤原義江に関して音楽よりも人物に注目が集まりすぎていることに懸念を示す。そして、演奏会の感想をオペラに関しては、「特に私はプッチニのマノンレスコにおける男性の異性に対する思慕か美しいパツショネートで唄はれるとき、彼の声量の豊かな内面にひそむ熱情にひかされた」〔阿曾村 1927d〕と記し、民謡については次のように記す：「第三部は邦語童謡民謡であつたが、私はこんなに完全な同様民謡を聴いたことがない。今迄、幾多の声楽家が唄ふ同様民謡に反感さへ持つてゐた私だが、あの解釈とあの声色には涙ぐましいものさへある〔阿曾村 1927〕。

藤原義江の音楽よりも人物について興味を持たれがちなことに対する指摘は的を射たものであるし、西洋音楽の専門知識が無くとも楽しめるように執筆されている批評は多くの読者を獲得したに違いない。

他方、山縣茂太郎は、賞賛することに関しては阿曾村と同様だが、演奏内容について専門用語を用いてやや詳しく記している。

9月20日記念館において催されたりサイタルは未だかつて試みられたことのない質のよいものであつた。このリサイタルにおいて氏の特に比類のないものといわれてゐるピアニツスイモの美麗さに接することが出来たのは今なほ色あわき夢をさぐるがごとく数々の妙なる連想のヴェールをひらいてくれる〔山縣 1927〕。

演奏会を音楽の言葉を用いて語る山縣の批評は、音楽愛好家にとって楽しみなものであったことだろう。

深井の批評はさらに専門的が高まる。誰しも認めるところであるからむしろ別のことにに関して議論したいと断り、連載前半では日本歌曲についての自分の意見を展開し、後半ではピアニストのシャピロに焦点を挙げる。日本歌曲については演奏よりもむしろ山田耕作の作品に注目し、《城ヶ島の雨》、《短夜》、《馬売り》といった一連の芸術的歌謡を優れたものであると考え、《箱根八里》や《沖の鷗に》のような俗謡的な歌曲を俗悪であるとして切り捨てる。また、ピアニストのシャピロについては、憑かれたように絶賛する。そもそも秋田くんだりによつてきて演奏会を開くようなピアニストではないと言い放ち、「マキシムシャピロを秋田で見るなんていふことは——適当な比喩が見あたらないが、まづ牛小屋に金貨を拾つたやうな気がする」〔深井 1927c〕と切り出したあと、シャピロのプロフィールを述べた後、次のように評していく。例えば、歌曲の伴奏に関しては次の通りである。

宣叙調<sup>(22)</sup>の後につづくあのラールゴーの美しさをきき給へ。《すみれ》におけるあの可憐な解釈、そして左手を流れるユーモレスクなスタカット。《子守唄》におけるあのピアノシモのタッチと音色<sup>ねいろ</sup>。又《リゴレット》におけるあの輝き。《カルメン》における右手のトレモロ。《待ちぼうけ》におけるあのリズムツクニュアンス《麦打ち唄》におけるあの軽さ。すべては我々の驚きの種である〔深井 1927c〕。

あるいは、ベートーヴェンの《32の変奏曲》については次の如く評する。

ピアノシモの時は彼の指は飽まで注意深く弓なりにまがる。フォルティシモの速いパッセージの時彼の肩は頸の両側でおどる。

快速なアルペジオがキイの端から端に走る。下降するトリブルのセクエンスが左手に移って物凄い半音階となつて上昇する。それが右手にうつり簡単になりトランクイロになるあたりのニュアンスはすさまじいものである。或時は又ポロネーズ風の形式から、急に二拍子の下降旋律となる。そして烈しいオクターヴが追ひつ追はれつして昇つて行く〔深井 1927c〕。

熱い文章に目を奪われがちだが、内容もそれに勝るとも劣らぬほど充実している。高度な内容を求めている人々にも十分対応したのではないだろうか。

三つの批評を振り返ると、初心者から専門家までをカバーしていることに気付かされる。また、留意したいのは、紹介記事や批評の執筆者の4人全てが当地の人である点である。秋田の西洋音楽が成熟していることが指摘できる。

### 2-3-3. 運営・企画

秋田公演の運営面に関する記述はほとんどない。深井が新聞評に「魁の壮举を讃へる。かげに立つて犠牲的に、はたらいて下された石田さんにも大いに感謝しなければならない」〔深井 1927b〕と記す程度である。膨大な量の近衛秀麿と藤原義江の紹介文を労っているように思われる。ただし、新聞社との関連の記載はない。一方秋田魁新聞社について石田は、「去年は関屋敏子の独奏会を主催し今年はまた藤原義江の独奏会を主催してわれわれに聞かし呉れることは聞かれる人々の多幸であると感謝する」〔石田 1927〕と記している。大正15年の秋に行われた同社主催の関屋敏子の独奏会が成功裡に終わったことを振り返るならば、藤原の独唱会は成功すると踏んだからこそ新聞社が主催することにしたと考えることもできる。

### 2-3-4. 当時の秋田の音楽文化——演奏会、ハーモニカ、弦楽合奏

藤原義江一色に染まったようにさえ見える昭和2年（1927）の9月の秋田であるが、それ以外にも華やかに、着実に演奏会が開かれている。例えば、地元出身の音楽家の小野崎晋三がピアノリサイタルを開いている。東京音楽学校卒業を記念して故郷秋田の記念館で行われたいわば「故郷に錦を飾る」性格を持つ演奏会であり、助演はヴァイオリニスト小林兼次郎、師範学校教諭ヴァイオリニスト伊藤順吉、メゾソプラノ宮越八重子、高等女学校教諭堀内信光。プログラムは、次の通りである。

#### 1 部

1. ピアノソロ 小野崎晋三氏 悲愴ソナタ第1楽章 作品10 3番 ベートーヴェン作
2. ヴァイオリンソロ 小林兼次郎氏 インデアンラーメント ドボルジャツク作
3. ピアノソロ 堀内信光氏 ベニスの舟歌 メンデルスソン作
4. メゾソプラノソロ 宮越八重子氏 A. さすらひの人 シューベルト作 B. からたちの花 山田耕作曲
5. ヴァイオリンソロ 小林兼次郎氏 A. ギョセランの子守唄 ゴタル作 B. トロイメライ シューマン作
6. ピアノソロ 小野崎晋三氏 ワルツ（円舞曲）作品64の2番 ショパン作

#### 2 部（——略——）

〔無記名〔秋田魁新報〕 1927a〕

悲愴やショパンのワルツのような現在良く演奏会で取り上げられるような作品に、トロイメライ、ギョセラン

の子守唄、インデアンラーメントのような当時頻繁に演奏された作品が混在している珍しいプログラムである。これだけの規模の演奏会を地域の人々が中心になって行っていることに注意したい。またこの演奏会も『秋田魁新報』に演奏会評が掲載された。評者は再び深井史郎である。

深井はほかならぬ自分が批評することについて——つまり演奏における価値判断の基準を示すことに対して——適任者とは言い難いと断った上で、感想を綴っていく。深井は小野崎の即物的な弾き方に関して、ベートーヴェンは良いが、シューベルトやショパンはニュアンスに欠けると評する。「ショパンのワルツは残念ながら失敗だといはねばならない。一体ワルツ等の節動法（アゴギイグ）の簡単な曲は、相互の対比と陰影がその生命であるといつてもいい。だから、それを忘れたらもう価値は失われてしまう」〔深井 1927a〕。おそらく彼は威勢良くピアノを叩いたのだろう。「記念館のピアノも悪くて気の毒だつた。小野崎さんのタッチが強いので、時々悲哀な音が出て来るピアノによつてタッチも少しは考へなければいけない」〔深井 1927a〕という描写から、相当苦痛に満ちた個所も想像される。あるいは、ヴァイオリンの小林について「小林さんは素人だそうだが素人らしくひくことはいい。恠情的なひき方だ、トリルが無骨でごまかしにきこえやうとも、ダブルストップピングで音程が狂はうとも、一向構はない。我々は彼の真面目な感傷を買つてやるべきである」〔深井 1927a〕。

概してかなり厳しい批評だが、それゆえに音楽をどのように聴くかというレッスンとしてみると、実に貴重なものであったのではないだろうか。本人の冒頭のどまどいがちな言葉からうかがわれるように、確かに万人向きではないが、若手演奏家を育て、同時に聴衆を育てることに重要な役割を果たしたのではないだろうか。ちなみに深井が藤原義江のリサイタルの批評を担当したのは、この批評の後である。おそらくこの批評の評判が良かったから、藤原義江の批評も担当することになったのではないだろうか。

10月の秋田の音楽界は活況である。まず、北村季晴率いる北村児童歌劇公演が行われる。また、秋田マンドリンソサイターによる秋季オーケストラ大演奏会も秋田記念館で開催される。さらに、場所は小坂の康楽館だが<sup>(23)</sup>、立松房子が30日にリサイタルを開かれている。音楽愛好家は忙しい日々を過したようだ。邦楽は、地域で普通に営まれていたのはもちろんであるが、5日に長唄の大規模な会が催されている。長唄の師匠杵屋喜千代が開いたもので、会員数は150名である〔無記名〔秋田魁新報〕1927h〕。

注目したいのが、秋田マンドリンソサイターの演奏会である。地域の合奏団の活動として東北で最古の歴史を持つ10名ほどのサークルで〔無記名〔秋田魁新報〕1926〕、指揮者は石田直太郎。藤原義江の演奏会の際に藤原と近衛に関する連載を行った人物であり、深井史郎の最初の音楽の師でもあった。秋田中学（旧制）の教師であるが、同時に熱烈な音楽愛好家であり、深井はエッセイ「私が作曲をやりはじめたころ」〔深井 1965：318-328〕で、親しみを込めて師を回想している。羽目を外して遊蕩した話から始まり、思い出話に移り、仲良くなり始めた頃を次のように記す。「ある機会から、中学生の私は先生の書齋をしばしば訪れることになった。そこには古書や仏像の額などにとりまかれて一台のヴィクトローラがあった。後にはこれがブランスウィックに変わった。私はそこで《第6》や《クロイツェル・ソナタ》や、その他いろんなものを聴かせていただいた」〔深井 1965：320-321〕。

入場料50銭、会場は記念館で開かれた演奏会は、次のようなプログラムである。

1. 序曲「カイロの鷺鳥」<sup>〔がちょう〕</sup> ピアノトラウト
2. マンドリン独奏 佐藤雄二郎 第1狂想司伴奏 アリエンツイオ
3. (イ) 伊太利交響楽中の併歩調 メンデルゾーン  
(ロ) 第一交響楽中の快速調 ベートウフエン
4. ギター独奏 深井史郎 モツアルトの主題による導入曲と変奏曲 ソル作品9番
5. 華麗なる幻想曲「黎明」 ファンタウツツイ<sup>(24)</sup>

6. 童謡独唱 築山 廣山竹子 マンドリンオルケストラ伴奏

(イ) あの町この町 中山晋平

(ロ) 夢

7. 組曲「沃女の舞」 プウシユロンイントロダクション ワルツレント 誘惑の情景 ピッツイカット 酒宴の唄  
〔無記名〔秋田魁新報〕 1927i〕

マンドリンのための作品はもとより、マンドリン伴奏の唱歌、オーケストラ曲の編曲とバラエティに富むプログラムである。新聞報道によると、演奏会は大好評であった。「熱心な会員の研究練習は第2回発表演奏会にも増して著しく洗練され、約500の好楽家をして多大の満足を与へしめたが、特にオーケストラ伴奏の廣山武子さんの童謡は男女小学生に非常に歓迎され大盛況に午後9時半に閉会した」〔無記名〔秋田魁新報〕 1927j〕。男女小学生とは、おそらく廣山の同級生だろう。

なお、この演奏会にもギター独奏として深井史郎の名前を認めることができる。演奏内容は不明だが、この頃から傑出した音楽能力を発揮していたのではないだろうか。当時彼は弱冠二十歳だが、文筆に、演奏に多くの人々が彼の才能を認めていたと推察される。

10月29日には記念館で秋田師範学校音楽部の演奏会が開かれている。一般公開されたので、多くの人々が楽しんだと思われる。プログラムは次の通りである。

第1部

伴奏 山田、石川、土門、菊池

1. 三重唱 三浦、石井、斉藤 空しく老いぬ ユングスト編
2. ハーモニカ5部合奏 ハーモニカバンド (イ) セレナーデ (ロ) 印度の小酋長川口章吾編
3. テノール独唱 齋藤貞直 (イ) 浜辺のうた 成田為三作曲 (ロ) サントルチア ナポリ民謡
4. ピアノ連弾 山田、菊池 (イ) 夜の曲 ショパン作曲 (ロ) ヴェイナマーチ チェルニー作曲
5. 三部合唱 第2付属尋6全体 古寺 エスグゴロク作曲
6. ヴァイオリン2重奏 遠藤、京野 オリエンタル ルボミルスキイ作曲
7. ピアノ独弾 田中正司 アラ、トラウカ モツアルト作曲
8. マンドリン合奏 弦友会員 歌劇「マルタ」 フロトウ作曲
9. ヴァイオリン独奏 (イ) 金婚式 メリー作曲 (ロ) ガボット ゴゼック作曲

第2部 (——略——)

〔無記名〔秋田魁新報〕 1927k〕

ハーモニカ、マンドリン、ヴァイオリン、ピアノとバラエティーに富む。当時の演奏会でよく見かける曲が並んでいる。演奏曲目に《浜辺の歌》があるが、秋田師範は成田為三の母校である。

昭和2年(1927)の秋田における西洋音楽を概観したが、驚くほど活発な演奏会活動や充実した音楽批評を指摘することができる。ハーモニカ等の軽便な楽器の簡単な音楽の普及は言うまでもなく、小野崎、深井、石田達の活動から高度な西洋音楽を楽しむ人々が見えてくる。



### 3. 普及のメカニズム

札幌、盛岡、秋田で開催された藤原義江の演奏会を題材にして、昭和2年（1927）の秋の各都市の状況を概観し、演奏会の宣伝を明らかにした。最後にこれら調査結果を比較検討して、普及のメカニズムを考えてみたい。

まず指摘できるのが、秋田記念館や岩手県公会堂に見られる環境整備の重要性である。秋田や盛岡で開催された演奏会の会場を調べると、頻繁にこれらの会場名を認めることができる。岩手県公会堂の演奏会記録が示すように、音楽文化の発展には固定した会場が重要な役割を果たす。

また、札幌や秋田に見られる地元小売商の強い関与である。例えば、富貴堂や白根蓄音器店といった地域の書店や蓄音器店である。特に富貴堂は、藤原義江の演奏会に際して講演会を企画し、関連する札幌市民音楽協会の事務局を担当するなど、驚くべき手際で地域文化発信基地として重要な役割を果たした。十字屋楽器店を中心に発展した京都における西洋音楽文化との類似性が指摘される<sup>(25)</sup>。

また、『小樽新聞』、『北海タイムス』、『秋田魁日報』といった地域のリーディングペーパーの報道が果たす大きな役割である。特に秋田の場合など、〔Ueno 2013〕で指摘した大阪の事例の如く、ほとんど毎日の如く演奏会の報道がある。その内容も、単に演奏会の開催を連呼するのではなく、刻一刻と演奏会の準備が整えられていくことを報じる一方で、藤原義江や近衛秀麿といった人物に注目し、人生と人となりを紹介するという洗練されたものであった。地方紙の独占的な報道は、人々を演奏会に誘う絶大な効果があったと考えられる。

ただ、立派な演奏会場で演奏会が企画され、魅力的な演奏会の報道が行われても、必ずしも人々の興味を惹くとは限らない。この点に関して注目したいのが、各地に見られるローカライズされた西洋音楽の実践である。札幌、盛岡、秋田という三つの都市ではヴァイオリン、マンドリン、ハーモニカといった軽便な洋楽器による簡単な楽曲の演奏会や和洋合奏の演奏会が広く行われている。

公園では吹奏楽が行われ、歌劇団が活動し、奏楽堂、帝国劇場や中之島公会堂等では演奏会活動が行われているという東京や大阪の状況とは全く異なるが、しかし、むしろ適当な西洋音楽を楽しんでいるからこそ、人々はローカライズされた西洋音楽を楽しく歌い続ける藤原義江の演奏会に気負うことなく夢中になり、自然に受け入れたのではないだろうか？そして、北陸地域でも藤原義江や関屋敏子の演奏会が大盛況だったことを考慮するならば<sup>(26)</sup>、それほど珍しいことでもなかったと思われる。

また、このようなわけで、昭和2年の藤原義江の演奏会は各地の市井の人々に西洋音楽を広めるというよりは、近代的な演奏会という制度を紹介し、音楽を聴く習慣を広めることに重要な役割を果たしたと考えられる。

最後に問題として残るのが、低調な報道と演奏会の盛況が認められる盛岡の事例かもしれない。公会堂による文化活動の影響かもしれない<sup>(27)</sup>。あるいは、愛国婦人会の影響かもしれない。藤原義江の女性層への人気も考慮する必要があるだろう。普及における全国的なメディア・団体と地方メディアとの関係を含めて、今後の課題としたい。

※旧字は新字に改めた。ただし人名に関してはこれを除く。

※引用中の補筆は〔 〕で示した。

※判読不可能な文字は□で示した。

※汽車や汽船の時刻の考証は、〔旅行案内社 1927〕による。

※図1、図2、図4の写真画像は絵葉書による。撮影日時は不明。

※写真画像はトリミングとコントラスト及び明るさの調整のみ施した。

## 注

- 1 〔無記名〔小樽新聞〕 1927e〕、〔無記名〔岩手日報〕 1927f〕、〔無記名〔秋田魁新報〕 1927c〕に掲載されたプログラムより再構成した。三都市とも同一プログラムであるが、データは予告記事によるので変更が行われた可能性もある。札幌公演と秋田公演ではマキシム・シャピロによるベートーヴェン《32の変奏曲》が演奏された。
- 2 〔Ueno 2013〕参照。
- 3 〔前川、2001〕、〔井上 2006〕〔盛岡市史編纂委員会 1959：120-132〕
- 4 当時の北海道在住のロシア人に関しては、次のホームページを参照（2016年3月14日閲覧）。<http://hakodate-russia.com/main/book/book-2007/2007-02.html>
- 5 開拓使の出先機関の貴賓用ホテルとして建造された施設。後に札幌市に払い下げられ、会合や儀式など様々な用途に用いられてきた。
- 6 〔小林 2011：48〕によるならば、『小樽新聞』1935年8月13日(14148号)の発行部数は111,344部である。また、〔小林 2011：238〕によるならば、『北海タイムス』1937年11月30日(16752号)の発行部数は184,400部である。
- 7 グーグルマップを利用した測定による。
- 8 いずれかの販売促進活動が行われた可能性があるが、詳細は不明である。
- 9 現在の北海道大学交響楽団。戦時体制下で統合された。
- 10 図版と建物概要は〔〔岩手県〕 1927〕による。
- 11 二十四世親世宗家。
- 12 盛岡の雅号。訓読みすると「もりおか」になる。
- 13 黒沢尻町立黒沢尻実科高等女学校。
- 14 武田忠一郎。
- 15 俊寛の誤植と考えられる。
- 16 〔佐藤 1997〕を参照。
- 17 11月13日の一関音楽クラブ主催の演奏会にもレコードというプログラムが認められることから類推できるように、レコードを交えた演奏会はそれ以前にも行われていたに違いない。あるいは、プライベートなレコード音楽の鑑賞会もおそらく開かれていたと思われる。したがって、「最初の」という言葉は、新聞報道によるものだが、広く一般に公開される演奏会で、かつレコード音楽を主とする音楽会という意味で、この言葉が冠されたのだろう。
- 18 スイス製。
- 19 赤レンガのような色。
- 20 〔小林 2011：24〕によるならば、『秋田魁新報』1938年2月27日(16847号)の発行部数は21,000部である。
- 21 およそ121.2cm。
- 22 レチタティーヴォの訳語。
- 23 当時小坂町は鉱山産業の発展で、驚くべき栄華を誇った。
- 24 L.ファンタウィツィー。
- 25 〔岡野 2002：104-127〕参照。
- 26 〔上野 2007〕における福井、金沢、富山の事例を参照。
- 27 地域における公会堂の重要性に関しては、東京の事例として〔新藤 2014〕を参照。

## 演奏会に関する新聞記事一覧

### 小樽新聞

無記名	1927a	9月2日	「英国人を父にもつ涙と放浪の足跡 札幌三友館に独唱会を開く天才児 藤原義江氏」
無記名	1927b	9月13日	「藤原義江氏独唱会 素晴らしい人気」
無記名	1927c	9月13日	「藤原義江独唱会 素晴らしい人気」
無記名	1927d	9月14日	「函館でも藤原氏独唱 小樽市は中止」
無記名	1927e	9月15日	「藤原氏独唱会 愈々今夜札幌」
無記名	1927f	9月15日	「『音楽会を開くなら札幌』シ氏を賞（〔ほ〕め奥田氏を賞め 声楽家 藤原義江さんの話」
無記名	1927g	9月15日	「藤原義江氏の歓迎茶話会 今夜豊平館で」
無記名	1927h	9月16日	「藤原氏の成功 聴衆悉（〔ことごと〕く酔ふ」
無記名	1927i	9月17日	「堺青年団演奏」
〔藤原義江〕	1927a	9月18日	「楽聖の作品より先づ子守唄から 歌手になる秘伝について 藤原義江さんの話【上】」
〔藤原義江〕	1927b	9月20日	「楽聖の作品より先づ子守唄から 歌手になる秘伝について 藤原義江さんの話【中】」
〔藤原義江〕	1927c	9月21日	「楽聖の作品より先づ子守唄から 歌手になる秘伝について 藤原義江さんの話【下】」
無記名	1927j	9月27日	「妙技に酔ふ聴衆 エ氏の演奏会」
無記名	1927k	9月30日	「庁立小樽中学定期演奏会」

### 北海タイムス

無記名	1927a	10月12日	「立松夫人の独唱会 助演伴奏共斯界の名流 来る23日函館を振出しに」
無記名	1927b	10月14日	「新邦楽の童謡民謡 大会は16日今井記念館で」
無記名	1927c	10月27日	「レコード観賞会」

## 岩手日報

無記名	1927a	8月31日「柵南少年団で和洋音楽会 9月3日公会堂で」
無記名	1927b	9月19日「藤原氏演奏会 感激に満たきのふのワ…公…会…堂…」
無記名	1927c	11月11日「高農音楽会 12日同校で」
無記名	1927d	11月12日「太平洋横断飛行の資金募集音楽会 13日一関町で開催」
無記名	1927e	11月15日「水沢の音楽会 武田黒女教諭その他出演」
無記名	1927f	11月16日「藤原独唱会のプログラム」
無記名	1927g	11月18日「水沢女子青年郷土芸術会 19日小学校」
無記名	1927h	11月19日「盛岡高等女学校の音楽演奏会 23日賛助出演を得て」
無記名	1927i	11月22日「盛岡市最初のレコードコンサート 今夕盛岡聖公会で」
無記名	1927j	12月11日「時の流れ(3) 蓄音機万能 手回しラッパ付きから青電灯のコンサートまで 蓄音機の徒弟紙調琴」

## 秋田魁日報

無記名	1926	8月19日「マンドリンソサイエター」
無記名	1927a	9月7日「小野崎氏記念演奏会」
無記名	1927b	9月8日「『我等のテナー』藤原義江氏 本社主催で近く大独唱会開催」
石田直太郎	1927	9月14日「我等のテナー 藤原義江のこと(5)」
深井史郎	1927a	9月16日「小野崎さんの演奏会で」
無記名	1927c	9月16日「花輪と美しいプロ」
無記名	1927d	9月17日「酔へよ! 藤原氏の歌に 我らのテナーを迎える 20日の夜」
無記名	1927e	9月20日「愈よ今夕の音楽会 入場者ご注意」
無記名	1927f	9月22日「日本に帰つて一番よく唱つた 喜んで語る……藤原義江氏」
無記名	1927g	9月22日「恍惚と酔へる千余の聴衆 本社主催 盛況を極めた藤原氏独唱会」
[藤原義江]	1927d	9月22日「日本に帰つて一番よく唱つた 喜んで語る……藤原義江氏」
阿曾村秀一	1927	9月27日「藤原義江を聴く」
山縣茂太郎	1927	10月1日「藤原義江独唱会」
深井史郎	1927b	10月2日「音楽会のあと(一)」
深井史郎	1927c	10月4日「音楽会のあと(二)」
無記名	1927h	10月7日「非常に賑はつた長唄の会」
無記名	1927i	10月8日「マンドリン演奏会曲目」
無記名	1927j	10月10日「マンドリン演奏会盛況」
無記名	1927k	10月27日「男師秋季発表演奏会曲目」

## 参考文献一覧

- 伊藤秀五郎 1971 「札幌シンフォニーオーケストラの創設期」、北海道大学交響楽団[編]『北海道大学交響楽団 50 年史』札幌、北海道大学交響楽団、150-151。
- 井上隆明 2006 『秋田のうたと音楽家 一緒にうたいましょう』、秋田、無明舎出版。
- [岩手県] 1927 『御慶事記念 岩手県公会堂一覧』盛岡、岩手県。
- 上野正章 2007 『明治期から昭和前期の福井、石川、富山における西洋芸術音楽の普及について 課題番号:17652014 平成 17 年～18 年度 科学研究費補助金萌芽研究に基づく研究成果報告書』大阪、上野正章。
- Ueno Masaaki 2013 'The Diffusion of Western Art Music in Osaka during the 1920s', "Music, modernity and locality in interwar Japan: Osaka and beyond", eds.by Alison Tokita and Hugh de Ferranti, Ashgate, 75-92.
- 岡野弁 2002 『田中ゆき伝: 京都・十字屋のおかみさん 明治・大正・昭和京都音楽 60 年の伴奏者』京都、田中義雄。
- 越野武 1982 「街を彩る建物」、札幌市教育委員会文化資料室編『札幌の建物』、札幌、札幌市。
- 小林昌樹 2011 『雑誌新聞発行部数事典—昭和戦前期 附 発禁本部数総覧(文庫文献類従)』金沢、金沢文庫閣。
- 佐藤幹夫 1927 『新藤武の生涯』、盛岡、佐藤幹夫。
- 新藤浩伸 2014 『公会堂と民衆の近代 歴史が演出された舞台空間』、東京、東京大学出版会。
- 深井史郎 1965 『恐るるものへの風刺 ある作曲家の発言』東京、音楽之友社。
- 富貴堂[編著] 1968 『七十年のあゆみ』、札幌、富貴堂。
- 藤原義江 1928 『からたちの実』、東京、改造社。
- 富士原義江 1984 「私の履歴書」『私の履歴書 文化人 10』日本経済新聞社編、東京、日本経済新聞社。
- 前川公美夫 2001 『北海道音楽史』、札幌、亜細西社。
- 盛岡市史編纂委員会 1959 『盛岡市史 第 12 分冊』盛岡、盛岡市役所。
- [旅行案内社] 1927 『公認汽車汽船旅行案内』大正 16 年 1 月号。

# **The localization of Western Music in the cities of Sapporo, Morioka and Akita in autumn 1927 as seen through the prism of the Fujiwara Yoshie recital tour**

UENO Masaaki

Japanese cities saw an increase of the number of Western music concerts from the Taishō to Shōwa periods. One of the biggest recital tours of the period was that of Fujiwara Yoshie in the autumn of 1927. He gave concerts throughout Japan, and was a big success. This paper aims to clarifying the mechanisms of diffusing Western music in Japanese rural cities by focusing on the Fujiwara Yoshie recitals given in the three cities of Sapporo, Morioka and Akita. Firstly, these recitals are surveyed, and secondly, propagation of these recitals are elucidated and finally, the music culture of these cities is investigated. In conclusion, I will point out the effect of the advertising by local newspaper companies and the contribution of regional book shops and gramophone shops. I also point out that the musical tastes of the people in these cities shows a close affinity with the repertoire of Fujiwara's recital programs.

Keywords: Fujiwara Yoshie, Sapporo, Morioka (Iwate prefecture), Akita, history of japanese music (modern, reception study)